慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古典期終末期における変動とセイバル : 蛇形ベルトの分析から
Sub Title	Surpent-belts at Seibal in the terminal classic age
Author	佐藤, 孝裕(Sato, Takahiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.61, No.1/2 (1991. 12) ,p.153- 173
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19911200-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古典期終末期における変動とセイバル

――蛇形ベルトの分析から――

佐藤孝裕

一

セイバル Seibal は、グァテマラのペテン州に位置する比較的小規模なマヤ文明の遺跡である。セイバルに人々が居住するようになったのは、マヤ文明の諸遺跡中でもかなり古く、先古典期中期[1]の紀元前八〇〇年頃にまで遡る。その後次第に発展し、先古典期を通じて規模は拡大し続け、その後期には繁栄の極みに達する。しかし、その後衰退を始め、古典期前期の西暦三〇〇年から六〇〇年の間、セイバルは放棄される。この間は、僅かな残存人口の痕跡が見られるのみで、建築物や石碑等のモニュメントの建立は一切行なわれていない。セイバルの人口が再び増加し始めるのは、古典期後期に入ってからである。殊に、八世紀の終わり頃以降、彫刻が施された石碑が建てられ始めてから、セイバルは最盛期を迎える。当時、低地南部マヤ地域の諸センター[2]が次々と活動を停止し、放棄されていくという事態が進行中であっただけに、セイバルのこの遅れた繁栄は如何にも異様なものに映る。しかも、この時期に属する遺物は明確に非古典期マヤ的要素の存在を示しており、古典期マヤ文化に属さない人々が低地南部マヤ地域に侵入し、それが古典期マヤ文明の崩壊につながったとする仮説を支持する有力な根拠とみなされて今日に至っている。

この小論で、筆者はセイバルで見られる様々な非古典期マヤ的要素のうち、写実的な蛇の形をしたベルトに焦点を絞り、その意味するところを探り、又他の地域における類例との比較を通して、古典期から後古典期へと移り変わる時代のうねりにセイバルがどうかかわっていた

のかを考察したい。つまり、セイバルにおける変化の分析を通して、古典期後期から後古典期前期へと至る時代の変遷を展望することが本稿の目的である。

二

セイバルが発見されたのは一八九〇年頃とされているが、セイバルを初めて学術的に調査したのはマーラー Maler である。彼は一八九五年にセイバルを訪れ、石碑の写真撮影をし、簡単な地図を作成した。彼は一九〇五年に再訪し、以前作成した地図を修正した（Maler 1908）。一九一四年と一九一五年にはモーリー Morley がセイバルに行き、碑文の研究をしている（Morley 1938）。その後、ハーヴァード大学のアルタル・デ・サクリフィシオス Altar de Sacrificios 調査隊のメンバーがセイバルをおとずれた。中でも、ジョン・グレイアム John Graham は石碑の碑文について調査をし、又アダムズ Adams は初めて遺跡を発掘し、同時に新しい地図を作成した（Adams 1963）。その報告を受け、ピーボディ Peabody 博物館は、ウイリー Willey を団長スミス Smith を発掘責任者として大プロジェクトを開始する。発掘は一九六五年に始まり、一九六八年まで続けられた（Smith and Willey 1966, I. Graham 1967, Willey and Smith 1967, Sabloff 1970・1975, Tourtellot 1970・1983, Willey 1970・1978, Willey, Smith, Tourtellot and I. Graham 1975, Smith 1982）。セイバルが発掘の対象として選ばれた理由は、次の二点に集約できる。一つは、セイバルの石碑の多くがマヤ長期計算法の10バクトゥン Baktun の日付を持ち、これは南部低地マヤ地域で最も新しい時期に属するということであり、もう一つは、それらの石碑に非古典期マヤ的特徴が見られるということであった。すなわち、外部の民族がパシオン Pasión 川に侵入したとする仮説の検証が狙いにあったのである。[3]

三

セイバルにおいて非古典期マヤ的特徴を持つものは、土器・石碑・建築物等多岐に渡っている。ここでは先ず、「非古典期マヤ的」ということばの意味について考えてみたい。過去に発表された著作や論文では、「非古典期マヤ的」という言葉があたかも解決済みで、皆がそれについて同じ観念を共有するものと理解して、議論抜きで用いられているように筆者には思われるからである。

ジョン・グレイアムは、「非古典期的とは非マヤ的という意味ではなく、南部低地（マヤ地域）を特徴づける古典期的伝統以外の特質をもつもの」と定義づけている(J. Graham 1971)。しかしながら、この定義自体あいまいさを免れ得ない。マヤ文明は、他の文明から孤立して独自の発展を遂げたのではなく、メソアメリカMesoamericaという大きな文明圏の中の一地方文明として他の地域との相互交流を通して発展していったものなのである。換言すれば、他の地域の数々の文化要素を取り入れ、それによって更に自らを文化的に豊かにし形成されたのがマヤ文明なのである。従って、どこまでをマヤ的であり、どこからが非マヤ的かを判然と区別することは殆ど不可能であるのみならず、古典期に限っても、他の地域、例えばイサパ Izapa、テオティワカン Teotihuacán、ガルフ・コースト Gulf Coast 等の諸文明の影響を受けて形成された以上、古典期的と非古典期的との間に明確な境界線を引くのは困難である。ただ単に古典期と言っても、約七〇〇年という長期に渡っており、その間変化し続けているのである。例えば、西暦四〇〇年頃に、それまで低地南部マヤ地域で全く見られなかったある文化的要素が現れたとする。この文化的要素は、この時点では非古典期マヤ的と呼ぶことが出来る。しかし、これがマヤ文化に吸収されて定着し、古典期社会が崩壊するまで存続した場合、これを非古典期マヤ的と呼ぶことが出来るであろうか？　もし古典期に他の地域から低地南部マヤ地域に流入した全ての文化要素を非古典期マヤ的とみなすなら、「非古典期マヤ的なものは、数において古典期マヤ的なものを遥かに凌駕していたに違いない」(J. Graham 1973) ということになるのは当然である。従来は、こういう観点からの議論が欠如していたように思われる。

しかしながら、「非古典期マヤ的」という概念の精密な分析、及び新たな定義づけは膨大な量のサンプルと時間を要し、到底本稿では扱い得ない。従って、それは将来の課題として残しておき、本稿では次のような前提のもとに議論を進めていきたい。すなわち、本稿で「非古典期マヤ的」という言葉を使用する際、それは古典期後期及び終末期に土器や石碑などのモニュメント・建築物等に出現したある文化要素が、それ以前には南部低地マヤ地域では例が見られず、しかも同時代の他の地域と何らかの関連が考えられる、ということを意味するものとする。

四

マヤ地域のみならず、メソアメリカ芸術には先古典期から後古典期に至るまで蛇のモチーフは珍しくない(Piña Chan 1977, De la Garza 1984)。石碑等のモニュメントや建築物・土器等の遺物の装飾要素として、蛇の文様は主要な役割を占めている。その形態も抽象的なものから写実的なものまであり、非常に多様である。筆者が本稿で扱う古典期後期及び終末期にも、少なからぬ遺跡で蛇の図柄が見られる。しかし、写実的な蛇がそのまま表現されている例は余りなく、特にベルトとして現れている例は、セイバル、ムルチク Mul-Chic、ビルバオ Bilbao、エル・サポタル El Zapotal とエル・コクイテ El Cocuite の五遺跡でしか見られない。前述した通り、セイバルは低地南部マヤ地域に位置する。ムルチクは低地北部にあるが、低地マヤ地域にあるという点ではセイバルと同じである。これに対し、ビルバオはグアテマラ太平洋岸、エル・サポタルとエル・コクイテはベラクルス Veracruz と、いずれも低地マヤ地域外に位置している。これら五つの遺跡で見られる蛇形ベルトには、何らかのつながりがあるのであろうか？　以下、各遺跡ごとに検討していきたい。

セイバル

現在までにセイバルでは五六の石碑が発見されている。そのうち、彫刻が施されている石碑は、表1にあるように二二である。ジョン・グレイアムは、これら二二の石碑をA、Bの二つのタイプに大別している（J. Graham 1973）。A、B両タイプの分類の基準はいくつかあるが、その違いを一言で言えば、Aタイプの石碑に比べてBタイプの石碑の彫刻にはより非古典期マヤ的色相が濃いということである。蛇の形をしたベルトを締めている人物が彫られている石碑13は、後者のBタイプに属している。

表1　セイバルの彫刻石碑リスト

番号	年代（推定も含む）
1	A. D.869
2	A. D.869—889
3	A. D.874
4	A. D.869—889
5	A. D.780あるいは800
6	A. D.771
7	A. D.800
8	A. D.849
9	〃
10	〃
11	〃
12	不明
13	A. D.869—889
14	〃
15	〃
16	A. D.889以降
17	A. D.894あるいは899
18	〃
19	A. D.868
20	A. D.889
21	A. D.849
22	A. D.899以降

又、日付が刻まれた石碑はより古典期マヤ的特徴を有し、日付が刻まれていない石碑はチチェン・イツァー Chichén Itzá、プーク Puuc、コツマルワパ Cotzumalhuapa 等外部の影響を受けているとの説もある (Cohodas 1989)。

筆者は、日付が刻まれた石碑も少なくとも三期に分けられるのではないかと考えている。第一期には石碑6・5・7が含まれ、非常に古典期マヤ的な特徴を有している。第二期には石碑8・9・10・11・21が属し、非古典期マヤ的特徴が出現する。第三期に属するのは石碑19・1・3・20で、非古典期マヤ的特徴が極めて顕著になる。日付が刻まれていない石碑の全ては、様式上の推定年代によると、最後の第三期に入ることになる。ここで筆者が第三期の最初の石碑と判断した石碑19については、9・19・5・11・13（西暦八一六年一月一九日）の日付を持つとの説もある。しかし、いくつかの点で、この説には首肯出来ない。一つは、この石碑に彫られている人物は明らかに石碑9・11の人物の稚拙な模倣であると思われること。そしてもう一つは、しかもこの石碑は石碑3・13の人物に見られる特徴を共有しているということである。これらの理由から、石碑19は石碑9・11よりも新しく、異なった文化伝統に属し、且つ石碑3・13と同一集団によって製作されたと考える。この三区分は外来民族によるセイバルへの侵入仮説ともつながってくるのだが、それについては後で論じる。

さて、石碑13（図1）は建築物A24のテラス上に位置している。祭壇は付随していない。この石碑には石碑3と並んで、セイバルの全ての石碑の中でもとりわけ非古典期マヤ的要素があふれている。石碑の正面部に彫られている等身大の人物の髪型、鼻棒（鼻に通した装飾用の真直ぐの棒）、話していることを表現していると思われる口から出る渦巻 speech scroll、ベルト及び下帯の写実的な蛇等、むしろ古典期マヤ的な要素を見出す方が困難な程である。又、この人物は、長く背中に垂れた髪や鼻棒など、石碑3の中壇に彫られた人物と多くの特徴を共有している。同じ髪型、首飾りの人物は、バヤル Bayal[4]相の土器にも現れている (Sabloff 1970・1975)。サブロフによると、セイバルのパベジョン型彫刻 Pabellon Modeled-carved 土器は、石碑3・11・13と二二のデザイン上の要素、及び一つのテーマ上の要素を共有している。このことから、これらの石碑を建立した者と上記のアルタル Altar 精製オレンジ色 Fine Orange 土器をもた

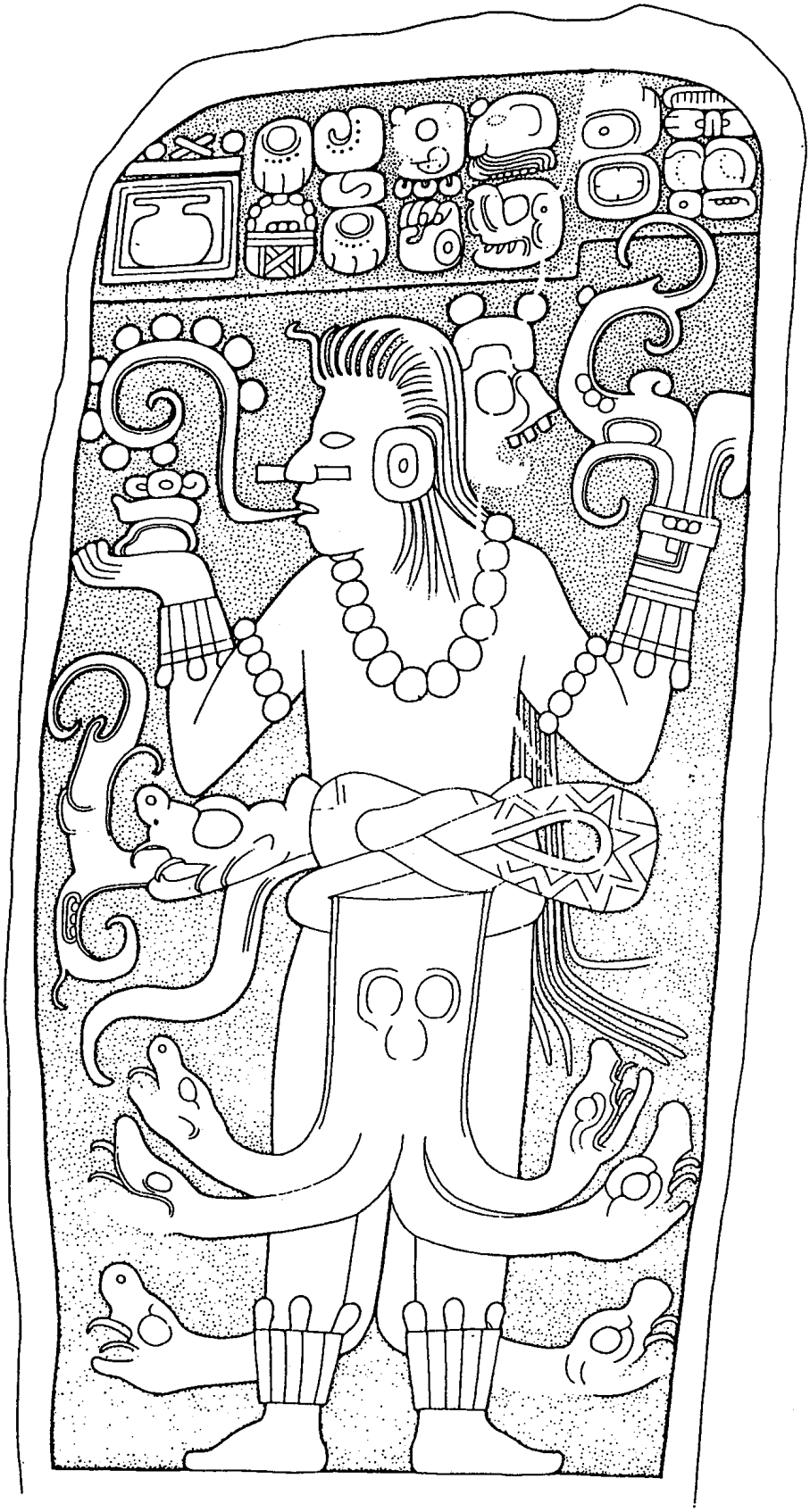

図1　セイバルの石碑13（J. Graham 画）

らした者とは、同一集団に属していたと推測することが出来る。石碑13の人物と同様の髪型と鼻棒を持つ人物は、チチェン・イツァーの大球戯場に描かれた球戯者の中にも多く見ることが出来る（Maldonado, C., Rubén, Kurjack, Edward B., Merle Green Robertson 1989）。

しかし、石碑13で最も際立つのは七匹の蛇であろう。文様と言うよりも、殆ど生物としての蛇そのものの姿で現れている。殊に、ベルトのように腰に巻きついた蛇は、生きた蛇そのものの姿で描かれており、非常に生々しい。口からは、立っている人物の左手の先端と同様のものを吐き出している。これはプロスクリアコフ Proskouriakoff によって渦巻文様として分類されているものの一つで、類例は多い（Proskouriakoff 1950）。セイバルのものと特に類似した渦巻文様は、ヤシュチラン Yaxchilan、ポナムパク Bonampak と、ウスマシンタ Usumacinta 川流域の遺跡で集中して見られ、しかも年代的にも西暦七九〇年頃以降と、古典期終末期に属している。このように、地理的にも時代的にも狭い範囲で出現しているということからセイバル、ボナムパク、ヤシュチランで見られるこの特殊な渦巻文様には何らかのつながりがあると考えられる。ウスマシンタ・パシオン両河川から多少離れているが、イツィムテ Itzimte 遺跡でも同時期に似たような渦巻文様が見られる。しかも、イツィムテの石碑7（図2）には、数匹の写実的な蛇が中央の人物にまとわりついている場面が彫られており、この点でもセイバルとの何らかのつながりを想起させる（Euw 1977）。

石碑13には日付が刻まれておらず、表面に彫られた図の様式から判断するしかない。それによると、西暦八六九―八八九年という年代が与えられている（J. Graham 1971）。二二あるセイバルの彫刻石碑のうち、日付が刻まれているものでは石碑1・3・20、様式からの推定によるものでは石碑2・4・14・15が恐らくこの時期に属している。このうち、石碑3はジョン・グレイアムによる分類のBタイプ、すなわち非古典期マヤ的要素の濃い方に属しているのに対し、石碑14・20は古典期マヤ的伝統の残るAタイプに属している。このようにこの問題となる時期の石碑を見ても、非古典期マヤ一色になっているのではなく、古典期マヤ的なものと非古典期マヤ的なものとが混在しているという事実は興味深い。

ムルチク

ムルチクは、プーク地方、ウシュマル Uxmal とカ

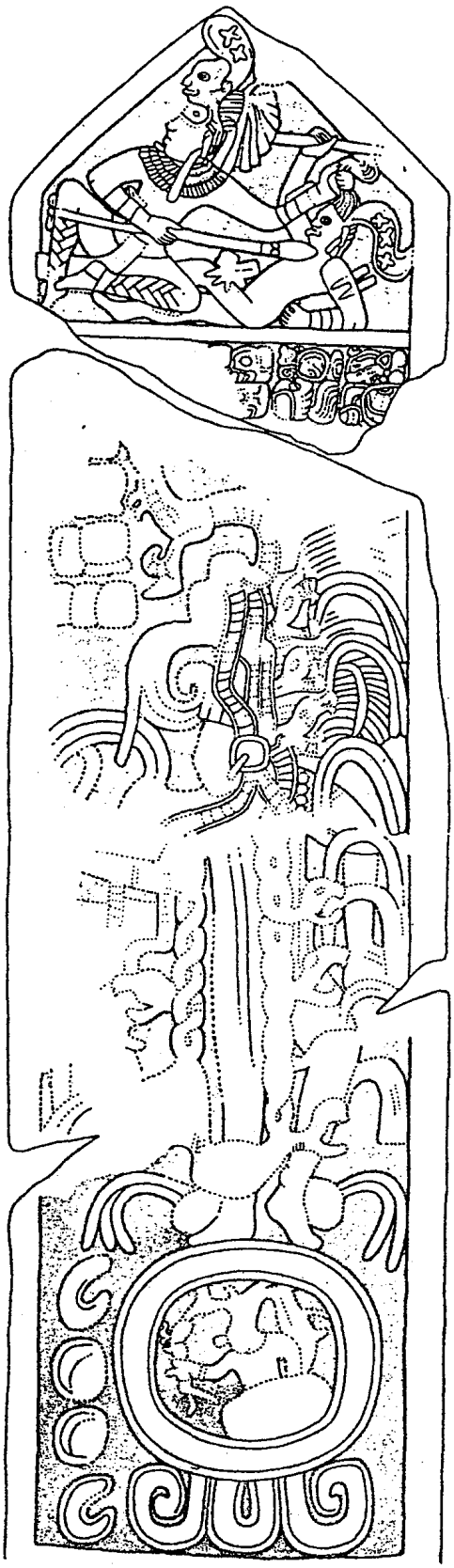

図2　イツィムテの石碑7（Euw 画）

バー Kabah の頂度真中辺りにある小遺跡である。この遺跡の建築物の一室の内壁には、高さ二・二〇メートル、長さ八・四〇メートルの壁画が描かれている（Piña Chan 1963・1964, Barrera Rubio 1980）。この壁画のテーマは、二つの集団間の戦闘、それに続く殺戮、捕虜の保護、神官の行進、捕虜の生けにえの準備とその実行である。テーマの点でも描かれた絵の様式の点でも、ボナムパクの壁画との類似性が指摘されている（Piña Chan 1964）。一方、この壁画に描かれている人物や彼らの衣装及び装身具には、ウシュマルやチチェン・イツァーとの数多くの共通点が見られる（Piña Chan 1980）。

ムルチクの壁画にも、写実的な蛇がいく匹も描かれている（図3）。又それらの蛇は、ベルトの位置に巻きついているものもあり、口から出ているものもある。しかも、それは神官と考えられている人物に集中している。

この壁画が二つの対立する集団の間の戦闘とその結果について描かれていることは疑いない。新たな集団がこの地域に到来し、彼らと先住の人々との間に戦いが出来したとの見方が一般的である。この新来の集団こそ、後にウシュマルに定住することになるシウ Xiu 族だとする説もある（Piña Chan 1980）。いずれにせよ、ムルチ

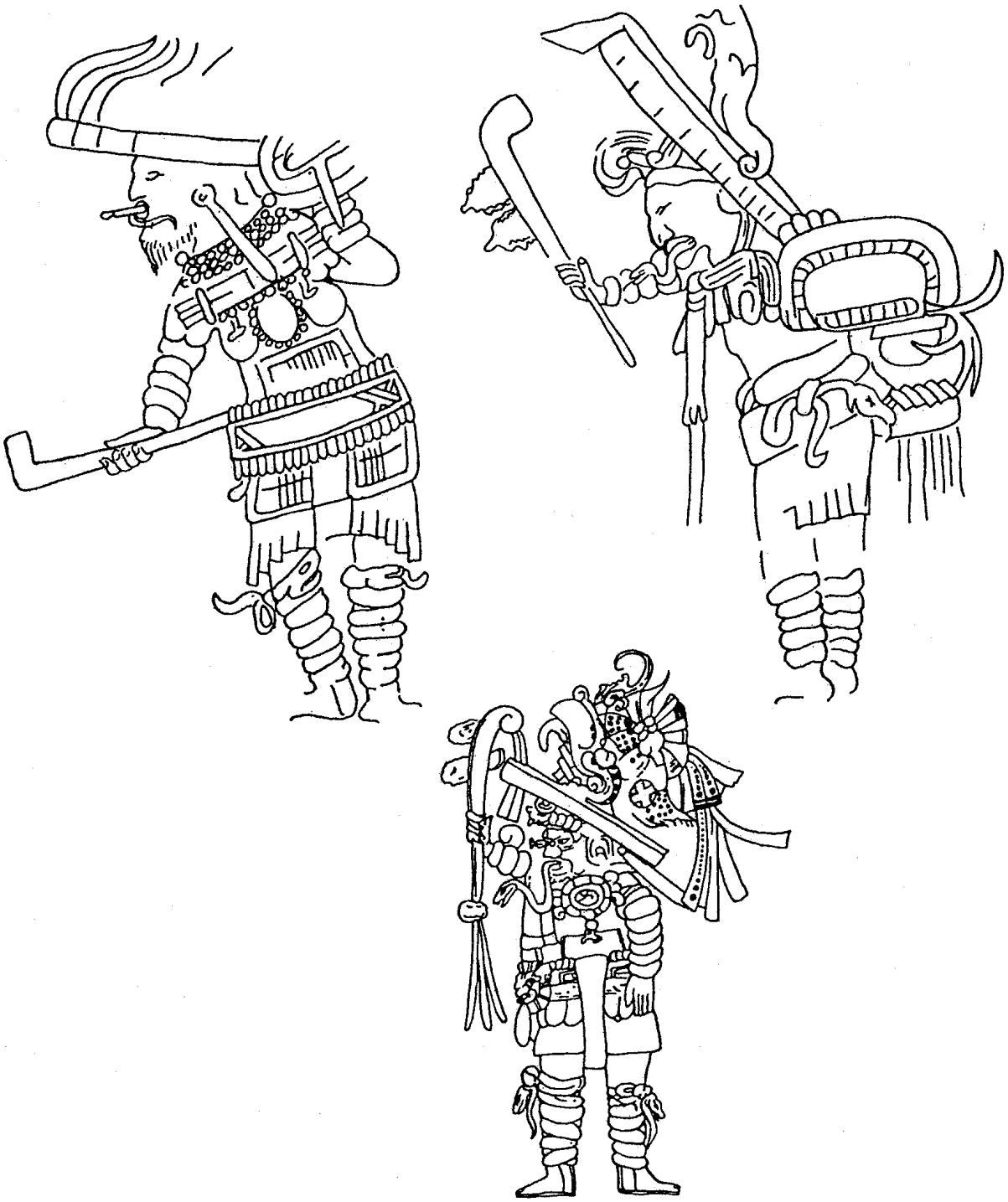

図3　ムルチクの壁画（Piña Chan 画）

クでも、蛇のベルトは侵入者と結びついているようである。

様式の点から判断したこの壁画の製作年代は西暦六〇〇年から西暦九〇〇年にかけてであり（Piña Chan 1964）、古典期後期から古典期終末期の頃のものと推定されている。

ビルバオ

ビルバオはグァテマラの太平洋岸、コツマルワパ地方に位置する小遺跡である。ここでは、モニュメント1・3・19の三つに写実的な蛇のベルトを締めた人物が彫られている。

モニュメント19は、中心となる人物が二人の人物と向かい合って話している場面を描いた岩刻画であり、その中心人物のベルトが蛇になっている。このモニュメントはサンタ・ルシア Santa Lucia 相[5]に属していると考えられている（Parsons 1969）。

これに対し、モニュメント1・3はそれよりも古いラグネタ Laguneta 相[5]に属している。モニュメント1では、中央に彫られたひときわ大きい人物のベルトが蛇になっている。左手に人間の首、右手にナイフを持っている点、更に服装などから考えて、球戯で勝った選手が負けた選手の首を切った場面を表しているのであろう。

モニュメント3では、モニュメント1・19と異なり、蛇のベルトを腰に巻いているのは中心人物ではなく、その右脇にいるより小さい人物である。この小人（?）は死の仮面をかぶり、左の中心人物と同様、球戯者の装いをしている。モニュメント1と同じく、儀式としての性格を持つ球戯を表現したものであろう。

このように、モニュメント19とモニュメント1・3とでは、製作年代が異なるのみならず、後者には球戯との関連が色濃く反映されているのに前者にはそれが見られないというように、モチーフの点でも異なっている。

メキシコ中央高原に由来すると見られるコツマルワパ文化の発展は、ラグネタ相とサンタ・ルシア相、およそ西暦四〇〇年から西暦九〇〇年の間に限定されており、ビルバオのモニュメントの四分の三はこの両相に属している（Parsons 1969）。この時期の特徴として、テオティワカン文化とのつながりが挙げられる。例えば、先述したモニュメント1・3には、テオティワカン様式の発語を表わす渦巻文様、speech scroll が描かれている。又、モニュメント19ではテオティワカンに始まってアステカ人の時代まで継承される鷲とジャガーの軍事編制が

示唆されている。メキシコ中央高原のテオティワカンだけではなく、ベラクルスやオアハカ Oaxaca からの影響もグァテマラ太平洋岸に及んだ。こういう外部からの様々な影響を受けて生まれたのが、折衷的な性格を持つコツマルワパ文化である。しかし、この文化は、低地南部マヤ地域で栄えた古典期マヤ文明と同様に、後古典期が始まる頃には消滅した。

エル・サポタルとエル・コクイテ

今まで述べてきたセイバル、ムルチク、ビルバオがマヤ地域の遺跡であるのに対し、エル・サポタルとエル・コクイテの両遺跡はベラクルスに位置している。この両遺跡からは、腰に写実的な蛇のベルトを巻いた多数のシワコアトル Cihuacoatl の土偶が出土している（図4）[6]（Medellin Zenil 1983, Winfield Capitane 1989）。座像と立像の両方があるが、いずれも蛇のベルトを締め、又しばしば死者の神ミクトランテクートリ Mictlantecuhtli の香炉を左手に提げている。

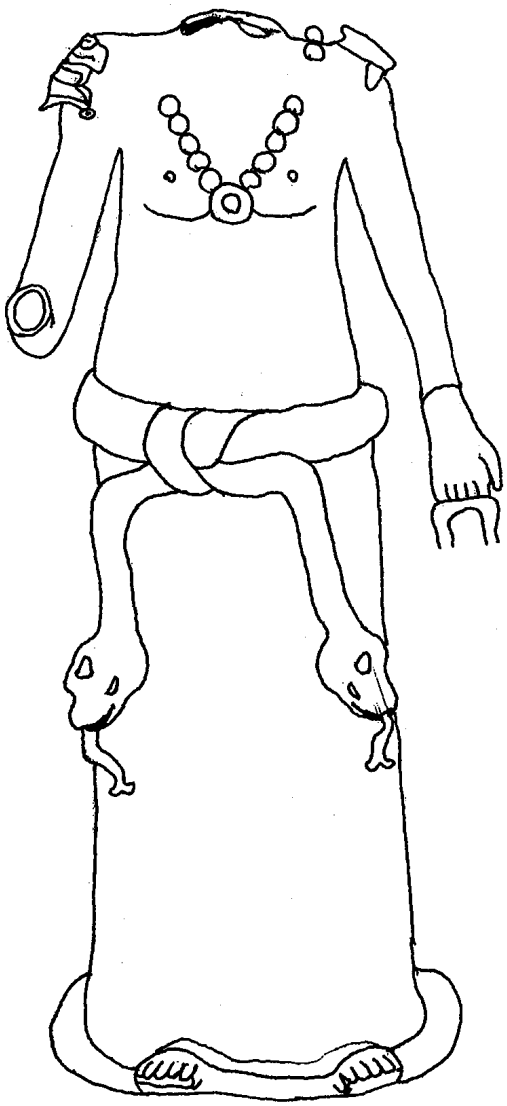

図4　エル・サポタルのシワコアトル像（左手に提げてるミクトランテクートリをかたどった香炉は省略）

これらのシワコアトル像が製作されたのは、古典期後期、大体六世紀から九世紀頃と推測されている。従って、時期的にはセイバル、ムルチク、ビルバオの諸例と重なる可能性がある。ただ、蛇のベルトを身につけた人物がシワコアトルと同定されている点が異なる。又、それが女性であるという点でも決定的に異なっている。従って、このエル・サポタルとエル・コクイテのシワコアトル像を、セイバル、ムルチク、ビルバオの諸例と同列に論じるのが適当かどうか疑問のようにも思われる。そこで、写実的な蛇の形をしたベルトという特殊な例

についての議論から暫時離れて、次ではマヤ人が蛇を如何なる存在とみなしていたかについて考察してみたい。

五

マヤ文化の造形美術では、蛇のモチーフは最も重要なものである。しかし、その大部分は様式化・抽象化された蛇である。そしてしばしば蛇本来の特徴は、空想的な要素、あるいは他の動物の体の特徴と結びつけられ、想像上の存在として表現された。

マヤ人にとって、動物は自然の諸力・時間・生命力、あるいは死などと結びついたシンボルであり、蛇もその例外ではなかった。従って、聖なるものではあっても、神そのものではなかった。蛇は、天と地、男性と女性、生と死、混沌と秩序といった宇宙の相反する存在を体現するものであった。蛇は、聖なる力の現れであり、自然界・人間・時間の創造者でもあった。

このように聖なる存在としての蛇がメソアメリカで表現されるようになったのは古く、先古典期にまで遡る。古典期マヤ文明の勃興に大きな影響を与えたと考えられているイサパでも、蛇が宗教的シンボルの中で中心的な位置を占めている。そして、チアパ・デ・コルソ Chiapa de Corzo で「翼のある蛇」の観念が現れる（De la Garza 1989）。この観念は、古典期後期以降メソアメリカに広がるケツァルコアトル Quetzalcóatl 神への信仰と混じり合うに至る。つまり、ケツアルコアトル信仰が到来する以前に、「翼のある蛇」の観念はマヤ人の精神世界では既に枢要なものだったのである。

王、あるいは神官と思われる人物が蛇と共に描かれている場面は、古典期や後古典期に盛行するのだが、マヤ地域では原古典期のイサパ及びカミナルフュー Kaminaljuyu に見ることが出来る。イサパやカミナルフュー以降、王と蛇的特徴を持つ動物シンボルの結合という伝統が始まったようである。そしてこの伝統は古典期のマヤ文化に深く浸透していくことになる。古典期の石碑や楣などのモニュメントに描かれた王達の衣装及び装身具、時には背景までもが蛇形モチーフで満ちているのである。

では、この王、あるいは社会の支配者と蛇の結びつきは何を意味するのであろうか？　先にも述べたように、蛇は天と地や豊饒を表わすのみならず、世界の統一原理を体現する存在であり、人間と自然とをつなぐ媒介として表わされた。従って、このような特性を持つと考えられた蛇をチーフとして利用した目的は、宇宙の生命力の

シンボルである蛇がその力を社会を治めるべき者に付与したというイメージを見る者に与える、ということであったと推測出来る。つまり、支配者は、聖なる存在である蛇をシンボルとして用いることにより、自らが聖なる力を有することを誇示しようとしたのである。

エル・サポタルとエル・コクイテのシワコアトル像では、大地と豊饒のシンボルとして蛇が用いられ、その意味で大地母神的なイメージを想起させる。その代わり、「王権付与」的なイメージは感じられない。他方、セイバル、ムルチク、ビルバオの例は、上に述べたことが当てはまると思われる。つまり、セイバルの石碑、ムルチクの壁画、ビルバオのモニュメントに描かれた人物は、社会の支配階級に属する人々であろう。

では、エル・サポタル、エル・コクイテとセイバル、ムルチク、ビルバオの蛇形ベルトは全く無関係なのであろうか？　この問いについては後で触れることにする。

六

これまではセイバル、ムルチク、ビルバオ、エル・サポタル、エル・コクイテの蛇形ベルトの諸例について別々に考察してきた。更には蛇形ベルトが持つ意味についても検討した。ここでは、それを踏まえて、セイバルと他の遺跡との関連について考えてみたい。

先ず、年代的にこれらの諸例を比較するのは極めて困難である。セイバルの石碑13が西暦八六九年から西暦八九年頃という様式上の推定年代を得ているだけで、ムルチクの壁画は西暦六〇〇年から西暦九〇〇年頃、ビルバオのモニュメント19は西暦七〇〇年から西暦九〇〇年頃、モニュメント1・3は西暦四〇〇年から西暦七〇〇年頃、エル・サポタルとエル・コクイテのシワコアトル像は西暦五〇〇年から西暦八〇〇年頃というように、いずれも製作年代を限定することが出来ない。ムルチクの壁画の場合は、もしピニャ・チャンが主張するようにシウ族の侵入に関するものであれば、下限が更に西暦一〇〇〇年頃まで下がる可能性もある(7)（Piña Chan 1980）。このように、これらの諸例を年代順に配列するのは不可能である。

では、蛇形ベルトの存在の他に、何らかの形態上の類似があるであろうか？　先ずセイバルの石碑13とビルバオのモニュメント1・3・19を見てみると、髪型、口から出る渦巻、素足であることなど、数々の共通点が見出される。他の石碑やモニュメントも含めると、類似点は

更に多くなる。このように、両者には何らかの関係があったことが窺われる。しかし、セイバルとビルバオには極めて重要な相違がある。セイバルを侵略した集団がもたらしたと考えられている精製オレンジ色土器がビルバオでは出土していないのである（Parsons 1969）。従って、もしセイバルとビルバオに何らかの関係があったとすれば、ビルバオがセイバルに影響を与えたと考えるしかない。あるいは、全く別の地から、両者が相互に無関係に影響を受けた結果、いくつもの類似点が生まれたのかも知れない。後で述べることから明らかなように、筆者は後者の方が蓋然性が高いと考えている。

目を他の遺跡に転じると、筆者が本稿で挙げた諸例を比較検討した限りでは、セイバルとムルチク、又セイバルとエル・サポタル、エル・コクイテの間には殆ど類似点を見出せない。

ここに、興味深い事実がある。上述の諸遺跡のモニュメント、壁画、遺物の持つ特徴の多くが、チチェン・イツァーで見出せるのである。例えばセイバルの場合、球戯場、円形建築物（セイバルの建築物79とチチェン・イツァーのエル・カラコル El Caracol）、建築物A2とエル・カスティーヨ El Castillo、セイバルのモニュメントとチチェン・イツァーの球戯場に描かれている人物の衣装、ほえているジャガー像、セイバルの第二期の石碑の人物とチチェン・イツァーの「星型頭像 star head」の容貌（V. Miller 1989）等、枚挙に暇がない。又アーサー・ミラー Arthur Miller は、チチェン・イツァーの神殿Aの南グループの壁画に描かれている戦闘の光景は、セイバルに関係があると主張している（A Miller 1977）。戦いの主役は「日輪王 Captain Sun Disk」と「蛇王 Captain Serpent」で、日輪王は石碑10・11に彫られた人物で、蛇王は石碑3・13・18の人物であるとしている。更に、彼によると日輪王はチチェン・イツァーから来ており、蛇王はタバスコ Tabasco 平原から来たプトウン＝イツァー Putun＝Itzá 族の分派の首長である。この説に従うと、石碑10・11は明らかに石碑3・13・18より古いので、先にチチェン・イツァーから来てセイバルを占居した日輪王に対して、タバスコ地方から来た後来の蛇王が戦いを挑んだということになる。

セイバルに二回の侵入があったと考えている研究者は少なくない。例えば、サブロフ（Sabloff 1973）とスミス（Smith 1982）は、最初に北部ユカタン Yacatan から、次にガルフ・コーストのタバスコ地方から侵入が

あったと唱えている。ただ侵入の時期については、サブロフは第一回が9・17・0・0・0（西暦七七一年一月二二日、以下、月日まで記しても意味がないので、年だけを記すことにする）頃で、第二回が10・2・0・0・0（西暦八六九年）から10・4・0・0・0（西暦九〇九年）頃としているのに対し、スミスはそれぞれ10・0・0・0・0（西暦八四九年）頃と10・3・0・0・0（西暦八八九年）以降と考えている。一方、アーレン・チェイス（A Chase 1985）は、最初にガルフ・コーストからの侵略者が9・19・0・0・0（西暦八一〇年）頃までにはセイバルに到来し、その後チチェン・イツァーからの侵略者が10・1・0・0・0（西暦八六九年）頃ユカタン半島東岸からやって来たと唱えている。

筆者は、先述したように、セイバルの石碑を三期に区分している。そして、各期がそれぞれ異なる侵入者によって生み出されたと考えている。つまり、セイバルには三回の侵入があったと考えているのである。長い間殆ど放棄されていたセイバルで再び人口が増加し始めしかも初めて彫刻石碑が建てられたのは八世紀後半であった。これは、殆ど無人状態だったセイバルに新たな集団が到来して定住した結果であろう。彼らは古典期のマヤ文化を持つマヤ人であったと思われる。これが第一期である。そこに、恐らく10・0・0・0・0（西暦八三〇年）頃、古典期マヤ文化に属さない集団が侵入する。こうして第二期が始まる。この時期に属する石碑や建築物などから判断して、彼らはチチェン・イツァーとつながりを持つ集団であったと思われる。その後、10・1・0・0・0（西暦八四九年）を過ぎた頃、精製オレンジ色土器と密接なつながりを持つ新たな集団が、恐らくはガルフ・コーストからセイバルに侵入する。彼らは、より非古典期マヤ的な特徴をセイバルにもたらす。蛇形ベルトもその一つである。しかし、この第三期に建てられた石碑から判断して、これら非古典期マヤ的文化を持つ先住と後来の両集団は共存した可能性がある。それは、これら二つの集団が共により大きな民族集団の分派であり、近似した文化を持っていたせいかも知れない。

その民族集団とは、プトウンとも呼ばれるチョンタル・マヤ Chontal Maya 族[8]である。彼らは古典期マヤ文明が栄えた地域に隣接した地に住み、メキシコ中央高原の影響を受けたマヤ人であった[9]。チョンタル・マヤ族は、政治・経済的には競合していたが、同じ文化を共有する数多くの集団から成っていたようである。イツァー族や

シウ族のみならず、キチェー Quiché 族やカクチケル Cakchiquel 族もその一員であった（Piña Chan 1980, Fox 1987）。

チョンタル・マヤ族が居住していたガルフ・コーストには、メキシコ中央高原からだけではなく、中央ベラクルス、ワステカ Huasteca やグァテマラ太平洋岸からの文化も流れ込み、ハイブリッドな文化が醸成された。その際、原古典期以降発展し、古典期に入ってからは大交易国家としてメソアメリカ全域に大きな影響を及ぼしたテオティワカンが開拓した陸上交易路が活用された可能性がある。又、ガルフ・コーストを通じて、各地域が相互に影響を与え合っていたことも考えられる。エル・サポタルとエル・コクイテのシワコアトル像の蛇形ベルトも、この文化交流の所産なのかも知れない。

各地域の文化の代表的な特徴として、ピニャ・チャンは次のようなものを挙げている（Piña Chan 1980）。〔中央ベラクルス・ワステカ〕鼻棒、男根崇拝、軛 yugo・しゅろの葉 palma・斧 hacha と呼ばれる球戯に関係があると見られる一連の石製品、球戯者の断首の光景など、〔ショチカルコ Xochicalco（メキシコ中央高原）〕ケツァルコアトル信仰、年の文字を持つ時の支配者像など、〔グァテマラ太平洋岸〕唐草風文様、蛇形ベルトなど。これらの特徴の殆どがチチェン・イツァーでも見出せる。つまり、チチェン・イツァーにトルテカ Toltec と呼ばれる文化的痕跡を残したのは、ガルフ・コーストからやって来たチョンタル・マヤ族の集団なのである（Andrews V and Sabloff 1986）。このように、チョンタル・マヤ族はメソアメリカの様々な地域と関係を持ち、古典期後期以降の時代の変動の主役となるのである。

七

古典期終末期のマヤ社会は、古典期後期に胎動を始めたメソアメリカ全体の大きなうねりの中にのみ込まれた。この変動に大きなかかわりを持っていたのが、ガルフ・コーストを拠点とするチョンタル・マヤ族であった。各地との交流を通じて混成した文化を共有する多数の集団から成る彼らは、西暦七〇〇年頃からユカタン半島を主な舞台として、他の地域への進出を始める。その痕跡はウスマシンタ・パシオン両河川流域、グァテマラ高地、ユカタン半島北部低地などに残っている。おそらくはカカシトラ Cacaxtla の壁画も、このチョンタル・マヤ族による波動的な活動の所産であろう。セイバルや他の遺

跡で見られる蛇形ベルトの存在も、古典期後期以降各地の文化が混成しつつあった時代背景を反映したものであろう。こうしてマヤ地域は、混沌とした古典期終末期の中から生まれ各地の文化が融合したチチェン・イツァーを中心とした新たな時代＝後古典期を迎えるのである。

註

（1）マヤ文明の編年は次の通り。

先古典期前期（前二〇〇〇年―前一〇〇〇年頃）、先古典期中期（前一〇〇〇年―前三〇〇年頃）、先古典期後期（前三〇〇年―紀元々年頃）、原古典期（紀元々年―西暦二五〇年頃）、古典期前期（西暦二五〇年―西暦六〇〇年頃）古典期後期（西暦六〇〇年―西暦八〇〇年頃）、古典期終末期（西暦八〇〇年―西暦一〇〇〇年頃）、後古典期前期（西暦一〇〇〇年―西暦一二五〇年頃）。

（2）センターとは、ピラミッド＝神殿、基壇、宮殿、石碑などを含んだ建築コンプレックスのことであり、かつてはセレモニアル・センターと呼ばれていた。最近では、センターの代りに都市という語を用いる研究者も多い。

（3）マヤ文明には数種類の暦があり、長期計算法 Long Count もその一つであった。これは、ある日が暦の起点となる日から何日経ったかを正確に記すことが出来、絶対暦とも言える暦表記法である。長期計算法は、バクトゥン Baktun、カトゥン Katun、トゥン Tun、ウィナル Uinal、キン Kin という五つの時の単位から成っている。これらの時の単位は、次のような関係になっている。

一キン＝一日
一ウィナル＝二〇キン＝二〇日
一トゥン＝一八ウィナル＝三六〇日
一カトゥン＝二〇トゥン＝七二〇〇日
一バクトゥン＝二〇カトゥン＝一四四〇〇〇日

時は、これらの時の単位を表わす文字に数字がついて表わされる。例えば、この暦の起点は、一三バクトゥン・〇カトゥン・〇トゥン・〇ウィナル、〇キンであるが、これは13・〇・〇・〇・〇（紀元前三一一四年八月一一日）と表記される。尚、バクトゥンより更に大きな時の単位も存在するが、滅多に使用されていないので、ここでは触れない。

（4）バヤル相は、セイバルの土器の編年区分による時期の一つで、およそ西暦八三〇年から西暦九三〇年頃にかけてのもの。

（5）サンタ・ルシアとラグネタは、ビルバオの土器の編年区分による時期の名称で、ラグネタ相は西暦四〇〇年から西暦七〇〇年頃、サンタ・ルシア相は西暦七〇〇年から西暦九〇〇年頃のものである。

（6）シワコアトルとは、出産後に死亡し、シワトラムパ Chiuatlampa と呼ばれ楽園に昇って神になった女性のことである。このように出産後に死んだ女性が神格化されたのは、それが戦士が戦場で死ぬのと同様に勇敢な行為だとみなされたことによる。

（7）ウシュマルを始めプーク地方の諸センターの繁栄は、チョンタル・マヤ族の到来によるところが大きい。そし

てその繁栄は西暦七七〇年頃には始まり、西暦九〇〇年以降は衰退し始める (Andrews V and Sabloff 1986)。このことから、その名称がシウ族であれ何であれ、チョンタル・マヤ族のユカタン半島北部地域への侵入はもっと早かっただろうと筆者は考える。

(8) アンドリューズとロブレスは、ガルフ・コースト人と呼ぶことを提唱している (Andrews and Robles 1985)。

(9) トムソンによると、チョンタル・マヤ族＝プトウンの主な居住地はポトンチャン Potonchan であった (Thampson 1970)。彼は、ポトンチャンとは「蛇プトゥン」という意味を表わしている可能性があるとも指摘している。もしそうだとすれば、セイバルとムルチクの蛇形ベルトを締めた人物は、蛇そのものが持つ意味とは別に、自分達がプトゥンであることをも示そうとしたのかも知れない。

参考文献

Adams, Richard E. W.

1963 "Seibal, Peten : Una secuencie cerámica preliminar y un nuevo mapa," Estudios de Cultura Maya, vol. 3, pp. 85–96.

Andrews, Anthony P. and Fernando Robles C.

1985 "Chichen Itza and Coba : An Itza–Maya Standoff in Early Postclassic Yucatan," in The Lowland Maya Postclassic, eds. Arlen F. Chase and Prudence M. Rice, pp. 62–72, University of Texas Press, Austin.

Andrews V, E. Wyllys, and Jeremy A. Sabloff

1986 "Classic to Postclassic ·· A Summary Discussion," in Late Lowland Maya Civilization, eds. Jeremy A. Sabloff and E. Wyllys Andrews V, pp. 433–456, A School of American Research Book, University of New Mexico Press, Albuouerque.

Barrera Rubio, Alfredo

1980 "Mural Paintings of the Puuc Region in Yucatan," in Third Palenque Round Table, 1978 Part2, ed. Merle Greene Robertson, pp. 173–182, University of Texas Press, Austin and London.

Chase, Arlen F.

1985 "Troubled Times : The Archaeology and Iconography of the Terminal Classic Southern Lowland Maya," in Fifth Palenque Round Table, 1963, vol. 1, VII, ed. Virginia M. Fields, pp. 103–114, Pre–Columbian Art Research Institute, San Francisco.

Cohodas, Marvin

1989 "The Epiclassic Problem : A Review and Alternative Model," in Mesoamerica after the Decline of Teotihuacan A. D. 700–900, eds. Richard A. Diehl and Janet Catherine Berlo, pp. 219–240, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D. C.

De La Garza, Mercedes

1984 El universo sagrado de la serpiente entre los mayas. Universidad Nacional Autónoma de México, Instituto de

Investigaciones Filológicas, Centro de Estudios Mayas, México, D. F.

Euw, Eric Von

1977 Itzimte, Pixoy, Tzum. Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions, vol, 4, part1, Peabody Museum, Harvard University, Cambridge.

Fox, John V.

1987 Maya Postclassic State Formation : Segmentary Lineage Migration in Advancing Frontiers. Cambridge University Press, Cambridge.

Graham, Ian

1967 Archaeological Explorations in El Peten, Guatemala. Middle American Research Institute Publication 33, Tulane University,New Orleans.

Graham, John A.

1971 "Non-Classic Insciptions and Sculptures at Seibal," in Papers on Olamec and Maya Archaeology, Contributions of the University of California Archaeological Research Facility, no. 13, University of California Press, Berkley.

1973 "Aspects of Non-Classic Presences in the Inscriptions and Sculptual Art of Seibal," in The Classic Maya Collapse, ed. T. Patrick Culbert, pp. 207-219, School of American Research Advanced Seminar Series, University of New Mexico Press, Albuquerque.

Maler, Teobert

1908 Explorations of the Upper Usumacinta and Adjacent Region Altar de Sacrificios ; Itsimté-Sácluk ; Cancuen. Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, vol. 4, no. 1, Harvard University, Cambridge.

Maldonade C, Rubén., Kurjack, Edward B., y Merle Greene Robertson

1989 "Los Juegos de pelota en las Tierrs Bajas del Norte," in Homenaje a Román Chan, eds. Robert García Moll y Angel García Cook, pp. 17-39, Instituto Nacional de Antropología e Historia, México, D. F.

Medellín Zenil, Alfonso

1983 Obras maestras del Museo de Xalapa, Studio Beatrice Trueblood, S. A., México, D. F.

Miller, Arthur G.

1977" 'Captains of the Itzá : Unpublished Mural Evidence from Chichén Itzá," in Social Process in Maya Prehistory, ed. Norman Hammond, pp. 195-225, Academic Press, Mew York.

Miller, Virginia E.

1989" Star Warriors at Chichen Itze," in Word and Image in Maya Culture : Explorations in Language, Writing, and Representation, eds. Hanks William F. and Don S. RIce, pp. 287-305, University of Utah Press, Salt Lake City.

Morley, Sylvanus G.

1938 The Inscriptions of Peten, Carnegie Institution of Washington Publication 437, Washington,D. C.

Parsons, Lee Allen

1969 Bilbao, Guatemala : An Arqueological Study of the Pacific Coast Cotzumalhuapa Region, Vol2. Publications in Anthropology 12, Milwaukee Public Museum, Milwaukee.

Piña Chan, Román

1963 "Informe Preliminar sobre Mul–Chic, Yucatan," Anales del Instituto Nacional de Antropologia e Historia, tomoXV, pp. 99–118.

1964 "Algunas consideraciones sobre las pinturas de Mul–Chic, Yucatan," Estudios de Cultura Maya, vol. 4, pp. 63–78.

1977 Quetzalcoatl Serpiente Emplumada. Fondo de Cultura Económica, México,D. F.

1980 Chichén Itzá La ciudad de los brujos del agua. Fondo de Cultura Económica, México, D. F.

Proskourriakoff,Tatiana A.

1950 A Study of Classic Maya Sculpture. Carnegie Institution of Washington Publication 593, Washington, D. C.

Sabloff, Jeremy A.

1970 "Type Descriptions of the Fine Paste Ceramics of the Bayal Boca Complex, Seibal, Peten, Guatemala," in Monographs and Papers in Maya Archaeology, ed. William R. Bullard, pp. 357–404, Papers of the Peabody Museum of Anthropology and Ethnology, vol. 61, Harvard University, Cambridge.

1973 "Continuity and Disruption during Terminal Late Classic Times at Seibal : Ceramic and Other Evidence," in The Classic Maya Collapse, ed. T. Patrik Culbert, School of American Research Advanced Seminar Series, pp. 107–131, University of New Mexico, Albuquerque.

1975 Excavations at Seibal : Ceramics, Memoirs of the Peabody Museum of Anthropology and Ethnology, vol. 13, no. 2, Harvard University, Cambridge.

Smith, A. L.

1982 Excavations at Seibal : Major Architecture and Caches. Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, vol. 15, no. 1, Harvard Unuversity,Cambridge.

Smith A. L., and Gordon R. Willey

1966 "Ceibal, 1965 : Segundo informe preliminar," Antropologia e Historia de Guatemala, vol. 18, no. 2, pp. 71–80.

Thompson, J. Erick S.

1970 Maya History and Religion. University of Oklahoma Press, Norman.

Tourtellot, G.

1970 "The Peripheries of Seibal : An Interim Report," in Monographs and Papers in Maya Archaeology, ed. William R. Bullard, Jr., Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology 61, pp. 405–415, Harvard University, Cambridge.

1983 Seibal Burials : A Cultural Analysis, Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology 17, Harvard University, Cambridge.

Willey, Gordon R.

1970 "The Xe Ceramics of Seibal, Peten, Guatemala," in Monographs and Papers in Maya Archaeology, ed. William R. Bullard, Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, vol. 61, pp. 313–355, Harvard University, Cambridge.
1978 Excavations at Seibal : Artifacts, Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, vol. 14, no. 1, Harvard University, Cambridge.
Willey, Gordon R., and A. L. Smith
1967 "A Temple at Seibal, Guatemala," Archaeology, vol. 20, no. 4, pp. 290–298.
Willey, Gordon R., A. L. Smith, G. Tourtellot, and Ian Graham
1975 Excavations at Seibal, Department of Peten, Guatemala : Introduction : The Site and Its Setting. Memoirs of the Peabody Museum, vol. 13, no. 1, Harvard University, Cambridge.
Winfirld Capitane, Fernando
1989 Las Culturas del golfo. Jalapa.